



- 2012年の日本人宿泊統計
- ジュール交響楽団(ハンガリー文化センターからの寄稿)
- コラム:連載第3回「クローク」

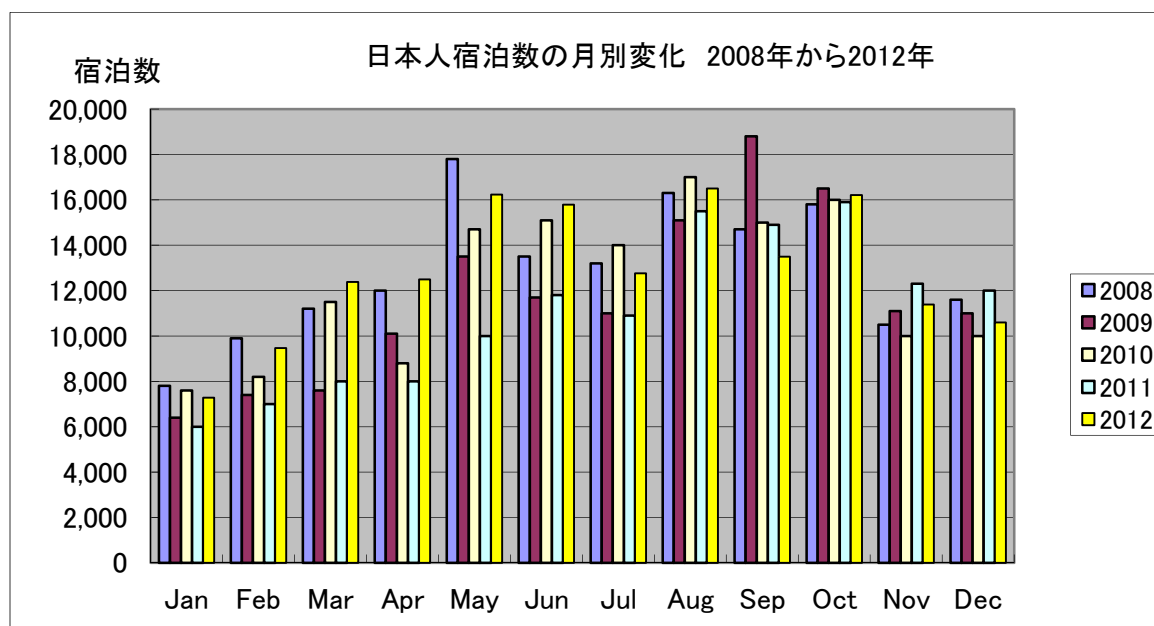
●2012年の日本人宿泊統計

ハンガリー国立中央統計局はこのたび2012年の宿泊統計を発表しました。

この統計値によると、年間の日本人宿泊数の累計は154,579泊で、前年に比べ14.7%の増加でした。一方、外国人宿泊数は11,299,804泊で8.5%の増加でした。また、中国人は128,374泊(+10.6%)、韓国人は70,536泊(+16.2%)でした。

以下に、2012年の日本人宿泊数の推移と、2008年から2012年までの月別の宿泊数の変化を示しました。

2012 月	日本人宿泊	
	宿泊数	対前年比(%)
1	7,278	136.2
2	9,467	127.2
3	12,380	148.8
4	12,491	165.2
5	16,229	156.0
6	15,788	120.7
7	12,760	115.9
8	16,497	104.8
9	13,494	89.6
10	16,209	100.3
11	11,389	91.5
12	10,597	87.8
計	154,579	114.7



●ジュール交響楽団(ハンガリー文化センターからの寄稿)

急行でブダペシュトからウィーンへ向かう途中、列車はジュールという美しい町に停車します。オーストリアとの国境から数キロの地点に位置し、ブダペシュトとウィーンの接点であるジュール市では、古くから貿易、商業、工業が盛んに営まれてきました。それに伴い、建築や音楽、美術といった芸術文化も大きな発展を遂げました。

ジュールは、ハンガリーで最も美しいと称されるバロック様式の街並みで知られています。現存する歴史的建造物の大部分は、17世紀から18世紀にかけて建てられたものです。神聖ローマ皇后であり、ハンガリー女王でもあったマリア・テレージアは、ジュールをこよなく愛しました。そして美しい街を我が物とせんがために、ジュールに「王国自由都市」の位を授けたのです。王国自由都市の称号は、都市が教会や地主ではなく、王家直属の地位にあることを示します。

そのジュールで今、クラシック音楽の文化が美しい花を咲かせています。近年、ジュール交響楽団が目覚ましい発展を見せているのです。世界的なクラリネット奏者ならびに指揮者であり、武蔵野音楽大学で教鞭をとるベルケシュ・カールマーン氏がジュール交響楽団の音楽監督に就任して以来、オーケストラは世界的な水準を誇る楽団へと成長しました。精密なアンサンブル、高い演奏技術、統一された音色美…現在、ジュール交響楽団は間違いなくヨーロッパで最も優れた楽団の一つだと言えるでしょう。

その実力はハンガリー国内外で高く評価されており、今年ウィーン楽友協会からの招待により、楽友協会大ホールで演奏会が開かれることが決定しました。毎年、ウィーン・フィルのニューイヤーコンサートが開催される、あの素晴らしい会場です。演目は、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲とブラームスの交響曲第二番です。ウィーンの聴衆は、「ブラームスはウィーン人にしか演奏できない」と強く自負しており、マネージャーからも演目の変更を打診されたそうですが、ベルケシュ氏はブラームスの交響曲を演奏する決意を変えませんでした。彼は自分が育て上げてきたオーケストラに自信と誇りを持っているのです。また、ブラームスがハンガリーのジプシー音楽を愛したように、ハンガリー人も、オーストリア人やドイツ人に負けない程ブラームスの音楽を愛しています。実際、19世紀を代表する音楽家の一人であり、ブラームスの生涯の友であったバイオリニスト、ヨアヒム・ヨーゼフはハンガリー人でした。また、作曲家のバイオリン・ソナタを初演したフバイ・イェヌもハンガリー人です。ハンガリーには、独自のブラームス奏法の伝統があるのです。

ジュール交響楽団の今後の演奏会一覧(抜粋)会場は4/6を除きジュール市内

- 3/7 **ムソルグスキー: 展覧会の絵** 他 指揮: ベルケシュ・カールマーン
- 3/16 **ボビー・マクファーリン**とジュール交響楽団の共演
- 4/6 **ブラームス: 交響曲第二番 二長調 作品 73** 他 指揮: ベルケシュ・カールマーン (ウィーン楽友協会)
- 4/25 **ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第四番 三長調 作品 58** 他 ピアノ: ランキ・デジャー、指揮: ベルケシュ・カールマーン

詳細は: <http://www.gyfz.hu/home/?language=en> (英語)

●コラム:連載第3回「クローク」

ハンガリーへの留学経験のあるペンネーム「カコ」さんによるブダペストでの生活体験をコラムにまとめていただき連載することにいたしました。

第3回「クローク」

留学中、コンサートや劇場にはしょっちゅう通っていた。ブダペストの中心部には東京の下北沢なみに劇場がある。下宿から語学学校にたどりつくまでいくつ劇場があるか数えたら、たかだか15分ほどの間に7つもあった。もちろんこれは密集地を通っているということもある。それでも、ブダペストのみならず地方都市にもかならず1つは劇場があり、演劇大国というこの国の知られざる姿を映し出している。

ハンガリーにはあまり理解できない習慣がいくつかあったが(同じようにハンガリー人が全く理解できない日本の習慣もあるだろうと思う)、なかでもよく解せなかったものに、これら劇場における「クローク使用必須」というものがある。大抵有料で、一回150~200フォリントである。500フォリントくらいの天井敷の席でもコートを持ち込もうとすると預けてこいと言われるし、ボックス席はボックス席で、コートは預ける必要はないが、録画防止のためなのか大きな荷物は預けるように言われる。そのため終演後はクローク前が大混雑になるので、早く帰るためには拍手の最中に抜けるなどの工夫が必要だ。

ある日、目抜き通りにあるオペラ座に立ち寄ると、ちょうど見たことのないバレエが始まるころだった。せっかくなので見ていこうと思い、それしか残っていないという高いボックス席を購入した。ここまではよかった。が、開演直前にホールに駆け込もうとしたところで案内係のおばあさんに止められてしまった。研究所帰りでパソコンだの本だのを詰めた巨大なリュックサックを背負っていたため、荷物を預けて来てほしいと言われたのだ。仕方なくクロークに向かう。

ところが、財布を開けてびっくり、あろうことか私はチケットで現金をほとんどすべて使ってしまったのである。財布には40フォリントくらいしか残っていなかった。というわけで、私はクローク係の女性を怒らせた。預けてこいと言われたんだけどお金がないと正直に言ってみたが、お札があるのではないかと何度も確認された。180フォリントすら払わない(払えない)なんてなんと非常識な、と思われたに違いない。本当はないのだということを見せると女性は諦め、引き換え用の札はあげられませんと言いながらしぶしぶ非公式に預かってくれた。

上演中、私はほとんど上の空だった。小心者なのでラッキーなどと安心することができず、これでは日本人とかアジア人はけちであるという変な印象を与えかねないし、これからも足しげく通うつもりなのに金を払わない人として覚えられたらたまらないと思った。そこで、幕間に残額140フォリントのために近くのATMまで走った。クローク係の女性はいそいそ驚き喜んで、引き換えの札をくれ、ようやく私は安堵したのだった。

残念ながら、この日に見た演目の詳細は全く覚えていない。



※オペラ座内部。上演中でなければ内部の写真撮影も OK である。

ハンガリー政府観光局

facebook: <http://www.facebook.com/HungaryTravelClubJP>

Twitter: https://twitter.com/HNTO_JP

ヨーロッパアンカルテット ブログと facebook

ブログサイト: <http://www.europeanquartetblog.com/>

facebook: <http://www.facebook.com/EuropeanQuartet>